

令和6年度 第2回 生駒市公益活動アドバイザー会議会議録

開催日時 令和6年8月22日(木) 10:00~12:00

開催場所 オンライン(生駒市役所4階403・404 会議室)

出席者

(アドバイザー) 佐藤由美氏、土坂のり子氏、山納洋氏(五十音順)

(事務局) 地域活力創生部長川島、市民活動推進センター所長大垣、
市民活動推進センター主幹佃、市民活動推進センター係員西田

(傍聴者) なし

案件

- 1 令和6年度 地域・社会活動創出支援事業(スタートアップコース)進捗状況報告
- 2 採択団体アンケートの結果報告について
- 3 令和7年度 生駒市地域・社会活動創出支援事業募集要項の運用改善について
- 4 その他 市民公益活動の支援方法について

以下、発言要旨

案件 1 令和6年度 地域・社会活動創出支援事業(スタートアップコース)進捗状況報告

(事務局) 今年度の地域社会活動創出支援事業補助金は申請のあった2件とも採択したことで活動の現状や予定を報告。

(アドバイザー) 活動を伴走して、どのような課題を感じていますか。また、どういったネットワークづくりをサポートしているのですか。

(事務局) まず、カラフルマインド運営委員会はいかにアートスクールと違う公益性を打ち出していくかが課題となっていました。非常に意欲的に取り組まれています。代表者は生駒市に2年前に転入されたばかりで、地域でのネットワークがまだできていない状態でしたので、生駒ですでに子どもたちの居場所づくりや不登校支援をされている団体の活動を見学し、地域の現状を把握してもらうことから始めています。まだ事業は開始しておりませんので、今後の展開を見守っていきます。正田耕一さんは、今回の里山利活用事業の他に農業にも取り組んでおられます。従来の活動部分と今回の申請事業のすみ分けに理解を促して、アプローチする必要性を感じています。

(アドバイザー) 正田さんは個人で活動を始められているので、どのように公益的な活動にするかが課題ですね。カラフルマインド運営委員会も同じで、個人的な想いと公益性の繋がりが、伴走の主眼になるということでしょうか。

(事務局) そのとおりです。

(アドバイザー) 丁寧な伴走支援をされていると思います。フリースクールをされている団体には、カラフルマインド運営委員会に対する印象を聞かれていますか。

(事務局) 少しお疲れになっていたようだったと聞いています。また、カラフルマインド運営委員会からはフリースクールの子どもたちが、とてもパワフルだったと聞いています。こちらの団体には、ボランティアとして継続的に関わり、子どもたちとの関わり方を模索していきたいと考えられています。

(アドバイザー) わかりました。いい刺激になったのかなと思います。

(アドバイザー) 不登校には、学校に行けない子と行かない子がいるということですね。学校というシステムで学ぶのが嫌だという子もいれば、どうしても朝、玄関から外に出られない子がいる。そんなことを実感しながら、その子たちの次の一步のための寄り添いが必要だと思いますが、そういったパースペクティブに基づいて、協働してくれる人のイメージも必要なのではないでしょうか。

(事務局) 申請者が、そういった見通しを持たれているかどうか、気に留めて伴走していきます。

(アドバイザー) 既存のカリキュラムに乗らず自分の人生を切り開くような子たちがいることに気が付いて、そこに寄り添った活動にしないと「思い描いていた状況と違う」と、申請者の心が折れてしまうこともあるはずです。これからも丁寧な伴走をしてください。

(アドバイザー) 既存の団体さんと繋いで協働できるようにしておくことは、1年目の伴走にふさわしいですね。また、カラフルマインド運営委員会がどのくらいのスパンで事業を考えておられるか見極めていただきたいです。正田さんは、「仲間を集める」ことをどのように考えておられますか。

(事務局) 一緒に里山整備に加わってもらうためのきっかけとしてのイベント実施は、直接的には考えておられないように思います。イベント参加者を仲間として巻き込んでいけるきっかけをサポートしていけたらと思います。

(アドバイザー) イベントにどのような人が来るのか、という点がとても大切です。タケノコからメンマを作るイベントに参加した4組は、地域の方か市外から来られた方なのでしょう。

(事務局) 元々しておられる農園で行われていたイベント参加者に広報されているので、地域の方が多いと思います。

(アドバイザー) 里山を切り開いていく技術ではなくて、コモンズの作り方に問題があるのかもしれませんが。仲間でチームを作って楽しむだけでは公益性に課題があります。コモンズを広げていく方向にもっていくことはできるのでしょうか。

(アドバイザー) 竹やぶの整備には、職人氣質が必要なところがあります。コモンズといいますか、新しいコミュニティを作るには、みんなの夢をそこで叶えられるというステージ性が重要になり、職人氣質と相いれないことが多いです。私の知る地域では、竹やぶを整備している団

体が職人気質で整備を目的にする活動と、いろんな方が参加できるイベントを開催する活動に分かれています。そして、イベントタイプの団体は、ほとんど竹やぶの整備はできていません。なので、この事業の公益性について、もう一度正田さんと一緒に考えていく必要があると思います。ミックス型をしようとする、人材のバリエーションが必要で、お1人ではできません。得意分野の違う方が集まって見事なタッグを組まない限りは、コミュニティスペースと整備の両立は不可能ではないかと思います。

(アドバイザー) 竹やぶの整備の職人気質は、一体どこからそうになっていくものなのですか。技術的に難しいということでしょうか。

(アドバイザー) 例えば、毎週必ず火曜日と木曜日は竹の整備に人をあてるシステムが構築できるのはイベントに集まる層には少し難しいと思います。歯に衣着せぬ言い方をすると、楽しいだけでは続かないということです。この月はこれをしなければいけないから、3ヶ月前にはここまで終えなければいけないというような、農家的な発想ができる人でないと難しいということです。

(アドバイザー) やらなければいけないことと、やりたいことの乖離が起きるということですか。

(アドバイザー) そのとおりです。

(事務局) 公園掃除や花壇の整備をする人と、公園を活用してイベントをする人の層も違います。そういった場合、整備や掃除をしている方の公益性は、コミュニティを作ることとは違う公益性を探したほうがいいというアドバイスと受け止めていいのでしょうか。

(アドバイザー) そうですね。正田さんやこの地域の方々が考えておられる公益性は、おそらく獣害がなくなることだと思います。イベント実施は付属のものではないでしょうか。その真意を見出す必要があります。

(事務局) 獣害がなくなることを目的とした事業なら、その活動に携わる人を増やして、システムティックに活動できるかを共に考える方がいいということではよろしいですか。

(アドバイザー) そのとおりです。

(アドバイザー) そうすると、地域に縁のない人をたくさん集めてイベントをするよりも、同じような悩みを持っている人たちがグループを作ったり、グループとグループが繋がって面的に広がっていったりするようなことが、この種の事業の公益性と捉えていいという感じでしょうか。

(アドバイザー) おっしゃるとおりです。もう一つ、カラフルマインド運営委員会は既存団体の建物でイベントをされるということでした。すでにその場に集まっている人の反応やハレーションが起きないか、少し注意深く追ってください。

(事務局) わかりました。ありがとうございます。

案件 2 採択団体アンケートの結果報告について

案件 3 令和7年度 生駒市地域・社会活動創出支援事業募集要項の運用改善について

(事務局) 補助金を活用して令和3年から5年に活動された6つの採択団体に実施したアンケート結果を報告。

(山納氏) 補助事業についてアンケートをされていますが、例えば地域創生塾のようなものがあって、公益性とは何だろうとか、そのために私は何ができるのだろうということを、半年間～1年間考えたり話し合ったりする場を設け、その卒業生がアプライできる補助事業があるという建てつけが必要ではないでしょうか。補助事業だけがスタンドアローンであっても、公益性をあまり理解しないままとか、既にやっている活動を応募するといったことが減らないのではないのでしょうか。

(事務局) 前回の会議でも地域を温めることが必要だとアドバイスを受けました。私達も補助金だけを用意していたことを反省し、学びの部分を講座などで充実させていきたいと考えています。

(佐藤氏) 案件3についてもあわせて説明された方がいいいですね。

(事務局) 補助金事業の要項改善についての素案を説明。

(土坂氏) アンケートの中に、提出物が多いという意見がありましたが、気にされる必要はありません。今後は、提出物は組織の運営や組織作りに繋がったかという視点で設問されたいと思います。もう1点、発展応援コースの上限額を30万円とされた背景をご説明ください。

(事務局) 1年目は一番予算が必要だろうという予測のもと、1年目30万円、2年目20万円、3年目1万円と補助額を下げていたのですが、「私たちは徐々に活動を大きくしたので、1年目が10万円で3年目が30万円の方がよかった」という声があがったことが見直しの要因です。また、3年の補助金でサポートできるのは、自立ではなく活動の継続であると助言いただいたこともあり、上限額は一定にしておき、その時期に必要な金額を申請してもらう方がいいいという判断です。

(土坂氏) わかりました。

(山納氏) 提案公募型委託事業ってありますね。補助率を決めるのではなくて、100%補助で委託事業にしますという方法ではダメでしょうか。立ち上げ期に一定のサポートがあって、公益を担える人が行政に成り代わって仕事をするという制度設計にするのはいかがですか。今、生駒市に必要なのは、どっちなのだろうなと思って聞いています。

(事務局) 生駒市は、他市で行われている提案公募型委託事業や協働型委託事業を実施できるほど、課題解決型の市民活動やそれに対する市職員の意識が成熟していないように思います。協働のテーマや事業を設定する事業担当課との調整が難しいことは、他の自治体からも聞いています。

(山納氏) なるほど。

- (事務局) 共創対話窓口という公民連携の統一窓口を生駒市も数年前から設けており、行政課題や社会課題を庁内で検討した上でテーマを設定しようという取り組みを仕掛けています。しかし、なかなか担当部署が民間との連携に慣れていません。機会を重ねていくことで意識を醸成する必要性を感じます。
- (山納氏) 今の補助事業は、3年後にそれを目指すのはどうですか。団体を育てて、市の事業を任せていくためのブリッジとしてこんな施策をやっていると位置づけられるのはいかがでしょう。
- (土坂氏) そうですね。成長って、すごく難しいですよ。市民公益活動は成果も測りづらいです。例えば、行政がこれを成果にしますと言っても、果たしてそれは市民の自発的な活動によって生まれる成果なのか。無理やり成長を求めたり、何かの成果を見えるようにしたりする建付けは、かえって市民の自発的な発展性を損ねてすれ違いが生じると思います。私の関わる地域でも、こういった補助事業は3年間の事業ビジョンを書かせて、行政が口を出して方向性を導くということがあります。でも、それはやはり行政という観点から見た公共性でしかなくて、本当に地域の人たちが目指しているものではないことが多いです。だから続きません。社会課題の解決というのが何なのかを、きちんと書ける申請書にするのは力量が問われると思います。
- (山納氏) 最初にイメージしたのは、事業内容を自由に考えてもらい、100%補助で30万円渡すという制度です。そうするとどうなるのかということは、調べてみる必要がありますが。
- (土坂氏) その制度を運用している地域がありますが、著しい成果は出ていません。
- (山納氏) 市民への任せ方の仕組みを変えたらいいというものでもないのでしょうか。
- (土坂氏) おそらく行政の中期計画とも絡んでくることです。中期計画に市民の自主的な協働の提案を促進するというような素地があって、はじめてできるものであり、その素地がない中で補助金として提案形をつくるというのは難しいと思います。
- (佐藤氏) 生駒市は総合計画で「自分らしく輝けるステージ・生駒」を掲げており、そういった意味から、1人ひとりが生き生きと活動するというのは重視しているのではないのでしょうか。また、今回制度を変えるのであればなるべく定着するように、長く使えるようなものにした方がいいですね。当初の制度は、将来的にビジネスとして成立するようなものをめざしていくという方針がありました。市民活動には自己実現を公益性に繋げていくパターンと、ソーシャルビジネスとして自立を目指すパターンがあります。行政の仕事を受けることができるようなレベルの活動を生むことを目指すのか、それとも市内各地にある程度自立した市民活動団体を増やしたいのか。どちらを目指すかによって、かなり違う気がしています。生駒市は住宅都市で、自営業者や商売っ気のある人がたくさんいる都市ではない中で、市民活動にあまりハードルを上げなくても一定の公益性を持って活動できる団体が増えていくことに着目していくのも大事だと思います。ですから、個人がグループを作りながら長く続く活動してもらうことを応援する。さらに発展する活動は、別の商工系の部署につなぐというような、市役所の中の繋がりを活

かして段階的にステップアップできるようにしていけばいいのではないのでしょうか。

（山納氏）なるほど、その方向に進むのでしょうか。尼崎市の福祉のイベントは提案公募型委託で「ミーツ・ザ・福祉」というイベントに変わりました。それを続けて今はその会社が川西市や豊中市の仕事をされています。そんな活動ができる人を生み出してもいいし、小さな自己実現を支えるのを生駒市のやり方にするのも確かにあるなと思いました。

（佐藤氏）そのあたりが生駒市の将来像にも関わってきます。その一方で生駒市は、地縁団体がまだしっかりしています。だから生駒市の地域活動は地縁団体に上手くなじまないような若い人たちが中心になるのかもしれませんが。若い人たちが課題だと思っていても、地縁活動では障がいのある子どもや学校に行かない子どもにはなかなか目を向けることは難しい。だから自分たちで立ち上げるというスタイルが多いのかもしれないと仮定すると、生活の中から出てくる課題を自分たちで解決していく道筋をつけるというのは、一つの柱としてはあるかなと思っています。事務局も他に悩んでいることがあれば、投げかけてください。

（事務局）他市の補助金の事例を調べる中で、京都府の申請書はその活動がいかに公益性と結びついていくか考えることができる様式になっていました。私たちもそのような方向性で進めたいのですが、市全体の雰囲気として地域課題を解決する活動を育てるというより、地域参加を促している状態にあるように思います。地域で楽しい活動をしたいと考えている方々にも、補助金の申請には地域課題の解決ということが一番を考えてもらう方が、広がりや継続があるものなのかアドバイスをいただきたいです。

（土坂氏）難しいですね。どちらのアプローチから市の公益を人々が成し遂げていくのか、想像がつかない部分があります。楽しい方から入っても、社会課題を見つけたところから入っても、どちらでもいいとは思いますが。ただ、いずれにしても楽しいだけではダメという気付きを得てもらう設計は必要です。活動を地域に広げていくとはどういうことなのか、一定の伴走支援は必要になる感じでしょうか。

（山納氏）助成金ではなくなりますが、何かちょっとやってみたい人の自己実現は、補助金よりも自由なことができるカフェやワークショップやマルシェを作った方が早いと思います。そこで仲間ができたなら、こんなことに取り組んでもいいと公益性の方に向かえるような気がします。小さく何か始める場所を用意したほうが、仲間は増えるのではないかなと。そういった場所は生駒市にもありますか。

（事務局）自分の得意なことを先生になって教える「IKOMAサマーセミナー」という事業や、まちを発信する「いこまち宣伝部」という事業があり、仲間づくりにつながっています。ただ、そこで対話が起ころうような場を作ることも意識的に取り組まないとダメなのではないでしょうか。

（土坂氏）そうですね。あくまで申請書段階での話ですが、そのような対話の場がなく書いた申請書と、対話の場を経て出てきた申請書を比べると、対話のない方が、軸がぶれずにかけていることも多いです。

- (山納氏) スタンドアローンで出せるほど強い人たちが申請してくるということでしょうか。
- (土坂氏) おっしゃるとおりです。
- (山納氏) 対話を重ねても、すぐには構築できないと。
- (土坂氏) 補助金の選考委員をしている中で、採択を提言する際に「失敗込みで見てください」とよく言います。この方法では成果は出せなかったという失敗の場としても、補助金が生かされることを許容できるかどうかは行政の考え次第ですね。
- (事務局) たくさんの民間企業や民間の財団が、市民活動を応援する補助金を用意しています。そのような中で、行政も補助金を用意する理由というのは、活動の失敗も応援するという風土を作ることにあるということでしょうか。
- (土坂氏) 10年前にその質問をされていたら、失敗してもらふ意義はあると答えていたと思います。しかし、2024年の今、失敗も込みで行政がお金を出せるかというところすごく難しいと思います。
- (佐藤氏) 地縁型ではない組織がコミットしながら地域課題を解決していくという方針は、ぶれる必要はないのではないのでしょうか。多様なプレーヤーが地域の中にいた方がいいという考えで進めるぐらいが、生駒には向いているかなと思いますが、そういう甘い考えでは難しいのでしょうか。
- (土坂氏) 市民活動育ては子育てと一緒に、一直線にはいかないものですよね。一度停滞するのも成長の一環として捉えることができたのなら、この補助金は意味のあるものだと思います。いずれにしてもその成長の捉え方ですね。
- (事務局) 先ほど、失敗の場としてもこの補助金が生かせたらとおっしゃったのは、その失敗が成長に繋がらないといけないということでしょうか。
- (土坂氏) おっしゃるとおりです。市民活動をする人たちは、考えを煮詰めるより先に体が動くタイプの人たちが多いので、大体は頭を打ちながら成長していきます。何か大きな失敗や苦い経験をする中で気づきが生まれ、ぐんと伸びる。
- (山納氏) 先ほどカラフルマインド運営委員会の方が、不登校児童のイメージが違っていたということがありました。力がある人ならアジャストするから、それに伴走していくことだと思いますが、とりもなおさず金額的なことより伴走者の力量に尽きるような気がします。だから伴走者も失敗と付き合うことができれば、成長していけるのではないかと楽観的に感じたりもします。
- (佐藤氏) 補助金が終わった後も繋がっていける関係ができれば、定着しやすいのかもしれないね。その方針があれば、活動する側も非常に安心できると思います。補助金を使いやすくしていくことと同時に、一旦活動を始めた人たちがきちんと成長できるということが大事なかもしれません。生駒市は地縁型の団体が頑張っておられますが、今からそれとつながることができる団体をきちんと育てておくことも、生駒市の重要な課題だと思います。地域の暮らしやすさに繋がる活動も広がっていくといいなと思います。裾野を広げておくことで、必要な活動も生まれやすい。京都市とは学生の数や地域のプレーヤーの数も全然違うので、どのような

取り組みがいいのか別の都市の事例を探る必要もあるでしょう。

(土坂氏) 10年後の地域を担う存在になっていくのかという根本的な絵描きはあってしかるべきです。地域を担う存在と位置付けるのであれば、何としてでも生み出して成長してもらわなければいけない状況ですよ。それが迫っている状況ですので、生駒市のビジョンによって取るべき質は違ってくると思います。

(山納氏) スケジュール感というか、何年後にどうなって、どんな生駒市になるために市民活動をどう育てていくかというビジョンが必要でしょうね。

(佐藤氏) 大きな宿題だと思いますが、やはりそれがないと市民活動についての議論はできません。そのあたりは市の方でいろいろ検討いただいているものと思います。

(事務局) 地域課題を行政サービスで解決しようと考えがち傾向があるので、課題をどのように伝えて、どう地域の力を活かしていくかを考えなければいけないと思って伺っています。

(佐藤氏) 都市計画から地域の将来像についての情報を得てもらえるといいかと思います。生駒市は丘陵地で、買い物支援や移動支援はこれから大きな市の課題になってくるはずですが、そういったことを地縁団体だけで取り組むには難しいので、生活課題に密着した新たな活動が生まれてくるといいと思います。地域課題にも目を向けてもらえるといいのですが、今は地縁型とテーマ型が分離しています。どこかで接続して手を結ぶ事例が出てくるといいですね。

(山納氏) 阪南市のまちづくり協議会の活動を調べたことがあります。お喋りサロンと呼ばれる100円喫茶に集まってきた人のニーズを拾って、買い物ができる場所を作ったり、移動支援をやってみたり、ママさんと子どもと地域のお年寄りが遊ぶ場を作ってみたりとか、ワンコインで庭の枝を切ってくれるサービスを提供する人たちが出てきたりとか。そんなことが包括的に動くような仕組みを作って表彰されたりしていました。できれば、補助事業の取り組みの先にそういったものが生まれてきてくれたらいいなと思います。

(土坂氏) 私の関わる地域は、地縁組織と市民活動の連携がなかなか進みづらいです。地縁は地縁、NPOはNPOで支援してきた長い歴史があるためです。こういった例も参考にしながら、この補助金で支援すべき活動は何なのかという部分をクリアにしていだけたらアプライしやすい。いろんな団体がアプライするというより、ここぞという団体がアプライしやすくなるいいと思います。

(佐藤氏) 補助金の制度について、事務局から質問はありますか。

(事務局) とても細かいことですが備品の支援は必要でしょうか。京都府は備品について積極的に支援をされていました。

(土坂氏) 京都府は消耗品の解釈がすごく広いです。必要なものが揃えば活動を継続していけるだろうという算段があったのかなと思います。居場所やサロン系の活動については、備品を揃えてあげることが必要かなと思います。

(事務局) 居場所作りに関しては、備品を活動の継続に必要なものとみなすという捉え方でいいでしょ

うか。

(土坂氏) 居場所作りとして必要なものと限定した方がいいと思います。

(事務局) わかりました。

(佐藤氏) 生駒市にもたくさんの補助金がありますので、他の課とも一度公益性とは何かということを協議されるといいのかなと感じました。

案件4 その他 市民公益活動の支援方法について

(事務局) 社会教育を支援する生涯学習課と、市民活動推進センターの役割の違いについて問われることが多くなっています。これについて、アドバイスをいただければと思います。また、広報広聴課には「いこまち宣伝部」と地域への参加を促す事業があり、毎年定員を超える申し込みがあります。しかし、その先に地域に根差した活動を広げることが難しい。どうすれば、10年後の生駒を作る活動が生まれるのかも合わせてご助言ください。

(佐藤氏) まさに趣味の活動やサークルはたくさんあると思いますが、そこから社会に目を向けた公益活動という部分が弱いですね。これを目指すのは、生涯学習との違いという意味からすると大事なのかなと思います。これまでも、この補助金は公益性を強調してきました。

(山納氏) 個人の活動であっても公益活動はあるので、活動主体と活動内容は整理したほうがいいですね。活動には自分軸と社会軸があります。個人軸だけではなく、社会軸で動き出す人を作ることが必要だと思います。もう一つ、やりたいからやる活動とやらなければいけない活動という里山保全みたいな話がありましたが、楽しいからコモンズを作るという公益活動する人もいます。何か人に伝えたいとか、喜んでほしいことは公益的なのかなと思ったりもします。

(土坂氏) 今おっしゃった自分軸、社会軸、やらなければいけない、やったら楽しいというマトリクスは非常にいいのではないかなと感じます。

(佐藤氏) 現状の活動を分類するということではなくて、もう少し理念的に考えていかなければいけないのでしょうね。やはり社会軸に気付いてもらわないといけない。地域課題解決に向けた取り組みを促したくても、意外に地域の課題は知られていない場合が多いです。活動のハウツーではなく、活動が必要な背景となる地域課題を学ぶ場があってもいいのかなと思いました。

(山納氏) サークルの活動についても、全く知り合いがいなくて孤立してしまっている人や地域にやってきたばかりの人にとっては、仲間を見つける場があることに相当意義があります。それを意識してサークル活動をすれば、公益活動と言えるかもしれません。閉じていたら公益性はないけれど、包摂すれば公益性が生まれます。孤立してしまっている人たちにも参加してもらえるような、こんなことをやりたいということを明確にする方がいいのでしょうか。

(佐藤氏) 活動をしながら別の課題に目を向けてもらえるかもしれません。やはり、いきなりお金を申請するのではなく温める、補助金制度の前の講座はすごく大事かもしれないですね。サークル

的な活動でも温めることによって公益性が生まれるかもしれないし、自分たちだけの活動としてやっていきたいという人たちには、支援の必要は低いと思いました。

（事務局） ありがとうございます。